

令和4年度 自己評価表

中長期目標 (学校ビジョン)	○未来に向かい 自分らしく輝き 豊かに生きる子どもを育成する。	今年度の 重点目標	○自己肯定感を高め、主体的に取り組む児童生徒の育成 ○質の高い職員員集団づくり ○安全で安心な学校づくり ○「チームくらよう」の推進
-------------------	---------------------------------	--------------	---

年 度 当 初					評 価 結 果 (10)月			
評価 項目	部	評価の 具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
自己肯定感を高め、主体的に取り組む児童生徒の育成	A 部門	○日々の活動に意欲的に取り組み、自分なりの方法で表現する児童生徒の育成	○児童生徒の表出や表現方法を探り、授業づくりに活かすことで児童生徒の活動意欲の向上や表現力の変容が見られてきた。 ○表出・表現方法の探り方や活用の仕方等については、その都度職員間での共有に努めているが、より効果的に進めるために、実態把握の手段や視点、分析結果の活かし方や、それぞれのニーズに応じた系統的な題材や教材についての検討と整理が必要である。	○児童生徒が自分なりの方法で表現したり、周囲の人に関わろうとしたりする姿が見られる。  ※教員の8割以上が「できた」と回答	○児童生徒一人一人の表出や表現の方法について整理し、職員間で共有する。 ○児童生徒の特性や発達段階、学習状況、生活年齢を総合的に捉えた実態把握を行う。 ○根拠のある目標設定やそれに向けた題材や教材の整理と精選を実施し、学びの積み上げがわかる指導の充実を図る。 ○児童生徒の表出や表現の方法について、保護者と情報を共有する。	○児童生徒の表出等についての職員間で共有については、授業に入る教員とねらいを共有したり、実践の様子を話したりするなど、すぐに情報共有するように心がけていた教員が多いが、どちらかというときたという回答が7割であるため、実際の共有方法等の具体的な方法を考える必要がある。 ○児童生徒の特性や発達段階、学習状況、生活年齢を総合的にとらえた実態把握については、どちらかというときできなかったという回答が1割あった。 ○根拠のある目標設定やそれに向けた題材や教材の整理と精選を実施し、学びの積み上げがわかる指導については、できたという回答が多かった。 ○保護者との情報共有については、教育支援会議や連絡帳等を通して話題にしたり、宿題として写真にコメントをつけてクラスルームで配信して家庭での振り返り等に活用してもらったりして、情報共有を図ることができつつある。 ○児童生徒が自分なりの方法で表現したり、周囲の人に関わろうとしたりする姿がみられるようになったと感じている教員が6割であった。どちらかというときみられるようになったと感じている教員が4割であるため、総合的な評価はBとした。	B	○児童生徒の表出や表現の方法の整理、職員間で共有のために、児童生徒の育てたい表出や表現の状況についての一覧表を作成して活用する。 ○クラスルームで情報共有を行う。 ○児童生徒の特性や発達段階、学習状況、生活年齢を総合的にとらえた実態把握をするために、現在の授業づくりにおける教材研究等をどのような視点で行っているのか振りかえってみる。
	B 小学部	○主体的に取り組んだり表現したりする姿へつながる指導、支援の工夫	○子どもたちの達成感や、主体的に取り組む意欲を育むため、教育活動全体を通して、子どもたちの表出や表現する学びの土壌を作っていく必要がある。	○児童が学習や生活の中で自分の伝えたいことや表現したいことを自分なりの方法で表出したり、表現したりする姿が見られる。  ※教員の8割以上が「できた」と回答 ※学習の振り返り場面の様子をとらえて子どもの変容を評価	○児童の表出力や表現力を広げるために、有効な教材等の整理を定期的実施する。 ○学習内容や指導・支援の方法を共有し、評価・改善を行う。 ○児童の学習の様子、学習の広がりについて、保護者や関係機関と共有し、連携を取っていくことを継続する。	○児童の実態に合う、表現に繋がる支援の方法を模索すること、児童の行動や気持ちに共感(表出言語だけにとらわれず)したり、児童の表出を待ったり、促したりする機会を多く設けたことで、日常生活(コミュニケーションなど)や振り返りの中で児童自身が自分なりに表情やジェスチャー、言葉等で表現することができるようになってきた。表現したいことを自己選択したり、身体表現、劇の台詞作り、言葉、言葉と体で伝えるなど、いろいろな表現力にも繋がっている。児童自身が自分で考えて行動し、また考えて行動する思考を繰り返しながら、児童の気持ちに寄り添い、取り組みを一步步つ進めることもできている。 ○日々の日常会話や、次単元の計画を立てる中で、興味関心を大事にしながら、主体的に児童がねらいや目標を達成できるための指導・支援について振り返りながら、指導場面に活かすようにしている。月に一度開催している各グループの会等では、児童の姿について情報を共有し、今後の成長に向け、担任だけではなくグループ全員で指導・支援していく体制をとっている。児童の実態をしっかり把握し、個々が輝く活動を意識して活動内容を考えている。教材については、夏期休業中に「教材を見合う会」を実施し、指導者間で教材の工夫等について学びを深めることができた。 ○児童の学習の様子や、学習の広がりについては、日々の連絡帳や学級通信等で保護者に発信し、児童の成長の過程を適宜伝えている。関係機関に対しても課題も含めながら、同行受診等で共有をし、専門的な助言をいただいている。	B	○振り返り要求場面等、児童の良さや得意なことを伝えたり、披露したりできる場面を意図的に組んでいき、さらに表現力や自己肯定感が高める学習場面を設定していく。 ○児童それぞれの主体性を育むための教材教具、単元設定や学習内容の工夫をさらに進める。指導者間でしっかりと学習や単元を振り返り、効果的な支援や学習内容の共有、また次単元や次年度に向けて改善できる点を話し合い、授業作りをしていく。
	B 中学部	○表現力の育成を目指した授業の充実	○教科の目標を明確にして、教科間の関連性を図りながら、授業実践の積み上げをしていく必要がある。	○生徒が自分なりの方法で気持ちや思いを伝えることができたり、文化活動において自分から進んで作品制作や身体表現に取り組んだりすることができる。 ○授業を通して、生徒が言葉やジェスチャーで「できた」「わかった」等の達成感を表現する姿がある。  ※以上の2点について、それぞれ教職員アンケートで8割「できた」と回答 ※生徒アンケートや学習の記録から評価	○学習活動を通して生徒一人ひとりにどのような表現力を育てるかを明確にし、生徒自身が自分の成長を実感できるよう、気持ちや思いを伝える学習の成果の視覚化を行う。例えば記録を教室掲示したり、ポートフォリオ評価を行ったりする。 ○前年度より新設された美術について、表現の楽しさをより一層経験するために、更に積極的な発信を行ったり、相互評価・他者評価の機会をもつ。	○自分の気持ちや思いを表現する場面を意図的に仕組んだことで、自分から伝えようとすることが増えてきている。 ○活動に見通しが持てるように工夫したり外部講師の活用を行ったりしたことで、生徒の活動に対する意欲向上に繋がり自発的に取り組む姿が増えてきた。 ○美術では鑑賞の時間を確保し、話しやすく認め合える雰囲気づくりに努めたことで、生徒がお互いに作品を見合い感想を伝えあえるようになってきている。美術以外の学習でも、学習の振り返りや思いを表現する機会を大切にし、発表活動が定着してきたことで、自分から学習の楽しさについて伝えようとする姿が増えてきた。 ○生徒アンケートより、8割程度の生徒が絵画や造形、写真、身体表現などの表現活動を好んで取り組んでいると回答している。 ○作品や観察日記等の掲示や、生徒の実態に合わせた振り返りシートの作成など学習の成果の視覚化を図っているが、学部全体・学習活動全体での取り組みまでには至っていない	B	○現在取り組みの継続を図りながら、育てたい力を明確にして学習内容の改善を図ることで、生徒自身が達成感を感じられる経験を積み重ね、より積極的な姿を引き出すことにつなげる。 ○教員間の情報共有や意見交換を活発にし、1つの学習や各学級での効果的な取り組みが学習グループや学部全体で取り組めるようにする。
B 高等部	○周りの人とのやりとりの中で、自分の意思を確実に伝えることができる生徒の育成	○単一生徒は、意思を伝えることができる相手が偏っていたり、一方的に意思を伝えるのみで相手の意見を受け入れることが難しかったりする生徒が多い。新入生は、言葉や頷き、首振りなどで意思を表すことはできるが、自分から周りの人に意思を伝えることが苦手な生徒が多い。  ○重複生徒は、言葉、頷きや首振り、やりたいことに向かっていく行動などで自分の意思を表したり、複数の選択肢の中から選んで自分の意思を表したりすることができるが、自分からの発信は少ない。	① 周りの人とのやりとりの中で、自分の意思や気持ちを素直に伝えることができる。 ② 周りの人からの声かけを受けて、自分なりの表現方法で、自分の意思を伝えることができる。  ※中間、学期末に、教職員アンケートをとる。 ①②とも80%が達成と回答した場合は、A評価。 ①②のいずれかが、80%が達成と回答した場合は、B評価。 ①②のいずれもが、達成と回答が80%以下の場合は、C評価。	①・授業や生活の中で、生徒同士、もしくは生徒と指導者がやりとりする機会を多く持つ。 ・お互いの意思や素直な気持ちを尊重しながら、方向性を決める。  ②・はい、いいえで答える、複数の選択肢の中から選ぶなど、自己選択、自己決定の機会を多く持つ。 ・自己決定を尊重し、自分の意見が周りの人に伝わったという経験を積み重ねる。	①約50%の先生方が達成と回答 指導者が意思表示や気持ちを聴くやりとりを心がけたことで、自分から素直に気持ちを伝える生徒が増えた。少しずつだが、困った時や気になることを生徒が相談できるようになり、トラブルが減った等の成果が見られた。しかし一方で、特定の指導者とのみでしかやりとりが成立しなかったり、生徒同士のやりとりの機会が少なかったり等と未達成の部分もあった。 ②80%以上の先生方が達成と回答 書いて伝える、うなづく、選択肢に対して意思表示をするなど、生徒それぞれの表現方法で意思を伝えることが増えた。指導者が、生徒に応じた声のかけ方を工夫したり、生徒が意思を表示するまでゆっくり待って意思表示を受け止めたりすることで、生徒が安心して自分の思いを伝えることができるようになってきた。 ②は、達成だが、①が未達成のため、中間時点では、B評価。	B	○多くの先生方がアンケートに書いていたが、やはり生徒との関係づくりが基盤となる。半年かけて築いてきた関係をさらに深め、生徒が安心して自分の意思を伝える機会を増やすようにしたい。 ○特定の指導者以外との関係を深めるために、教科学習や作業学習の際には、担任以外の指導者との関わりを深めるようにする。 ○生徒の実態の共通理解を進め、普段や授業の中で、どういう伝え方をすれば指導者とのやりとりがしやすいかを考えていく。 ○普段から生徒同士で会話のやりとりができるような機会を増やしたり、授業の中で生徒同士の会話のやりとりができるようなしなかけを話し合ったりしながら、実践を積み重ねる。	

様式 2

年 度 当 初					評 価 結 果 (10)月			
評価項目	部	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	次年度への改善方策
質の高い教職員集団づくり	研究部	○学習の基盤整備を活かした授業	○令和2, 3年度の校内研究で各種計画の整備やアセスメントの実施を行った。これらが授業にどのように活かされているのか教員間で学び合う機会が必要である。	○研究の日の授業公開を通してアセスメント等を授業に活かす工夫を知ることができる。 ※教職員アンケートで8割以上が「できた」と回答	○授業者がアセスメント等を授業に活かしやすくするための活用シートを準備する。 ○参観者が授業において着目すべきポイントを事前研修で確認する。	○授業者がアセスメント等を授業に活かす工夫を紹介するアピールシートを準備し、参観者はそのシートを見ながら参観することで、着目すべき工夫ポイントを明確にすることができた。  ※95%の教職員が研究の日の授業公開を通してアセスメント等を授業に活かす工夫を知ることができたと回答した。	A	○11月30日の研究の日では、B中とB高の授業公開を通して、アセスメント等を授業に活かす工夫を全職員でさらに共有していく。
	教務部	○個別の指導計画の新しい実践と検討	○今年度より、個別の指導計画の新様式を用いることとなった。本校の育てたい力「5分野の力」を柱とし、各教科でつけた力を明示する形である。この様式をすることで、指導者が各教科の目標を意識した授業づくりを実践するとともに、児童生徒の各教科等の力の育成が図れたかを検証する必要がある。	○個別の指導計画で立てられた各教科等の目標を意識した授業づくりをすることができる。 ○各教科等で個々に設定された目標に対して、達成度や次につながる評価を適切に行うことができる。 ※教職員アンケートで8割以上が肯定的評価であれば達成	○以下の3回、学級担任を中心に様式についてのアンケートと意見集約を行い、検討をしていく。①今年度計画の立案後(6月中旬) ②前期評価後(9月中旬) ③後期評価と次年度立案前(1月中旬)	6月中旬のアンケートと意見の中で、個別の指導計画の書き方が変わったり記入する量が増えたために負担が増えた、という意見がみられた。また、新転入生については教科等の目標設定のための実態把握の期間がもう少し必要であるという意見もあった。一方で、新様式で実践することで、指導者が各教科の目標を意識した授業づくりや適切な評価をするように日々取り組みつつある。教職員アンケートでは9割以上が肯定的評価である。 なお、アンケートにより、次年度の学級事務関係や年間の個別の指導計画の記載範囲の変更を進めている。	B	○9月中旬に実施予定としていたアンケートを10月末を目途に行い、前期評価と後期の目標設定で、記載が難しかった点や書きにくいと感じた点、また一方で現在の様式での利点についての意見を集約し、今後の記載の参考にしていく。 ○12月中に、次年度の個別の指導計画の書き方の説明を実施する。
	全体	○時間外業務の原因把握と改善	○分掌や学部の業務に偏りが生じており、調整していく必要がある。 ○昨年度、月45時間を超えて時間外勤務する実態がある。	○日々勤務簿の自己管理を徹底するとともに、自ら改善策を考え、取り組むことで業務カイゼンへの意識を高める。 ※教職員アンケートで8割以上が目標達成のための方策を「できた」と回答	○会議をしない日やノー残業ディを設定し、計画的に勤務をする環境を整えるとともに、勤務簿の自己管理を徹底する。 ○業務カイゼンに関する職員へのアンケートを実施した結果をもとに改善策を取り組みにいかす。	○教職員の83.5%が日々勤務簿の自己管理を徹底するとともに、自ら改善策を考え業務カイゼンに取り組んでいると回答した。 ○正確に時間外業務について入力できているが、特定の職員が月45時間を超えている実態があり、なかなか改善できていない。	B	○衛生委員会で時間外勤務が月45時間超えている職員の原因や背景を分析、改善策の検討を継続する。 ○企画会議等を活用し、業務カイゼンに関する職員へのアンケートを実施した結果をもとに改善策の進捗状況を把握する。
	事務部	○スムーズな事務処理と課題に対する解決	○業務の遅延が一部あった。 ○年度始めや予算要求時など時間外勤務が依然として多い。	○事務室のすべての業務を円滑に滞りなく、新たな工夫を取り入れ進化するように努める。	○達成時期までのスケジュールを事前に具体的に確認し、早め早めに動きだす。 ○遅延が予想される時は、協力を求める。	○概ね各業務を円滑に行うことができたが、一部、手当の現況確認の報告で遅れが生じた。 ○時間外勤務は減ってきているが、一部の職員に依然として時間外労働がある。	B	○管理職が業務の遂行状況を確認し、必要であればサポートして期限に間に合うように対応する。 ○業務の仕方や分担を見直し、業務量の平準化を検討する。
安全で安心な学校づくり	健康安全部	○安全・安心への意識と体制作り	○各種訓練、研修会、ヒヤリハット等を通して、教職員の安全で安心な環境づくりに対する意識を高めるよう努めている。 ○新型コロナウイルスへの対応が必要である。 ○iPadを活用した拡大安全点検の集計方法についてシステムを整えていく必要がある。 ○地震、不審者対応などの緊急時対応に課題が挙がっている。	○児童生徒が安全な環境で学習できるよう、緊急時の訓練や安全点検、ヒヤリハットでの情報共有、課題への対応を適切に行う。 ○本校の新型コロナ対応基準及びガイドラインに則した対応をすることができるように努める。 ※教職員アンケートで肯定的評価が8割以上。	○安全項目チェック表を活用した点検(iPad)を行う。(年2回) ○安全・安心への意識を高めたり体制作りを行ったりできるように、緊急時対応訓練などを計画、実施する。 ○必要に応じて新型コロナ関係の基準を作成し情報共有、徹底を呼びかける。また、Googleワークスペースを活用し、在宅でも情報を閲覧できるようにする。 ○挙がっている課題について事務部と連携して対応する。	○Googleフォームを活用した安全点検を夏休みに実施した。点検項目が分かって良かったという意見があった。 ○さすまたやヘルメット、消火器などの防災グッズの設置箇所を周知した。管理場所に防災グッズが設置してある箇所については、不備が無いのか毎月の安全点検で点検を行ってもらうように周知した。 ○学部毎で避難経路確認を行い、火災時の避難の仕方や避難ルートを確認した。 ○夏休みに予定していた不審者対応研修をコロナ感染予防のため中止した。ミニ研修として不審者対応マニュアルの説明を職員会で行ったが、実技研修が行えていない。 ○感染予防ガイドラインに沿った対応が行えるよう日常的に働きかけを行った。また、「調理活動のコロナ対応」の見直しを行い周知した。 ○昨年度からの引き継ぎ事項の教室の内鍵について、現状を調査し事務部に依頼した。グラウンド側のトランシーバー設置については、設置方法について現在検討中である。トランシーバーは購入済み。 ○教職員アンケートで肯定的評価が98%以上であった。	B	○来年度は4月の安全点検を行う際、詳細な点検項目を周知するようにする。 ○今年度中に、不審者対応に関するDVDを視聴する機会を設定し、対応についてイメージや意識を持てるようにする。 ○対応方針の変更に対応しながら新型コロナ対策の徹底を行う。 ○Googleワークスペースを活用した情報の閲覧については、管理職と相談しながら取り組んでいく。
	教育環境部	○より安全・安心な教育環境	○定期的な掃除道具点検、職員作業により、校舎内外の校内外の環境整備が整った。 ○TEAS報告やエコ点検を定期的に行っているが、エコについての取り組みがクラスによって差がある。特に、水道、紙の使用量が増えている。点検内容を見直したので、結果を見て呼びかけを行っている。	○安全・安心な教育環境づくりを行うとともに、エコに対する意識が高まる。 ※職員作業の実施(年2回) ※掃除道具点検の実施(学期1回) ※水道・電気の使用量が昨年度よりも減少する ※エコ点検で◎の割合が8割以上	○年に2回職員アンケートをもとに職員作業を計画実施し、安心安全で無駄のない環境づくりを行う。 ○委員会・分掌と連携し、環境、福祉に関する啓発をしていく。 ○電気、水の使用に対する具体的なエコに対する取り組みを示し、掲示板にTEAS報告を載せ、全校への意識づけを行ったり、職員への協力を呼びかけたりする。	○夏の職員作業では、整備場所の要望が増えたこともあり、全学部共通で移用する場所を中心に計画し、普段行えない箇所がきれいになった。 ○福祉、エコ美化、飼育緑化、図書委員会内で連絡を取り合い、連携できている。仕事の分量に偏りがあり、一つの委員会だけでは難しいこともあった。 ○昨年度討した新形式のチェック表を使用した。チェック項目がすっきりし、わかりやすくなった。福祉委員会で集計を行い、○△がどの項目に多いかがわかったので、今後は、ポスター作りや呼びかけを自分たちで考えてより具体的にエコを意識できるようにしていきたい。 ○ほぼすべての月で電気、水道、ごみの量が去年よりも減少した。	B	○学部で使用する場所に人手が割けなかったことで、冬の職員作業に入れる。 ○委員会の活動内容を整理して、学習部の特活とも相談し、来年の内容を検討する。 ○○△が多かった項目についてポスターを作り、呼びかける。エコ点検を行っていないクラスには都度呼びかける。委員会の生徒からも呼びかけを行う。

年 度 当 初					評 価 結 果 (10)月			
評価項目	部	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	次年度への改善方策
「チームくらよう」の推進	情報教育部	○本校教育についての理解啓発につながり、指導支援の連携を密にしていいため教育活動の発信 ○ICTを活用した効率的な業務改善	○定期的にHPで教育活動について発信してきた。HPのリニューアルも行き、より分かりやすいものとなった。 ○臨時休業やコロナ感染症対応のため、長期学校に登校できない状況が起こる可能性がある。その時のためのオンライン教材の活用やオンライン授業ができる体制がまだできていない。 ○アンケート処理など紙ベースのため非効率的な業務がある。	○教育活動や学校教育の情報掲載等、ホームページの充実を図る。 ※学部週1回以上のHP更新 ○感染状況を踏まえて校内においてオンライン授業を実施できるよう支援する。 ※オンライン教材等の作成、オンライン授業の配信体制作り ○Googleワークスペースの利用促進によりペーパーレス化および効率的な業務改善を図る。	○定期的に情報掲載できるよう各部門、学部で当番制にし、週1回は更新する。 ○教職員のICT研修を行い、教職員の意識を高めながら、オンライン教材作成や家庭での学習に役立つアプリの紹介、ダウンロードできるプリント教材のアップなどに取り組む。 ○各分掌業務の中でアンケートなどGoogleフォームで行ったり、ドライブやミートを利用するよう声掛けを行う。	○年度初めに学校ホームページにおける固定記事の掲載ができた。また、学校生活の様子をお伝えするくらようダイアリーの記事についても概ね定期的に更新することができた。 ○教職員を対象として月1回程度ICT研修を行い、ICT活用能力を高めることができた。しかし、参加者が限られているなど今後教職員全体のICT活用能力の向上を図る対策が求められる。 ○各分掌業務でリモート会議やドライブなどを中心にGoogleワークスペースの基本的な活用が進んだ。しかしGoogleワークスペースの活用による校務の情報化について一部の効果的な活用にとどまった。	B	○くらようダイアリーについては、より発信力を高めるため、学部単重ごとの当番制について検討する。 ○オンライン授業の実施の目標については新型コロナウイルス対応ということもあったが、そうではなく、情報化の進展に対応するために、すべての教職員を対象として全体研修とフォローアップ研修をセットにしてICT活用スキルをつけていくことを検討する。 ○来年度は教職員のみならず、児童生徒が学習でGoogleワークスペースの活用ができるよう研修を進めていくことを検討する。
	支援部(校内)	○PDCAサイクルに基づくケース検討会の実施	○校内支援委員会等で児童生徒の情報共有をすることはできているが、具体的な指導・支援について、検討したり評価したりしながら継続的に取り組んでいくことができなかった。	○校内支援委員会で情報共有とケース検討を繰り返し行い、PDCAサイクルで指導・支援について考える。  ・ケース会議実施者アンケートで8割以上が「校内支援委員会での検討が日々の支援に役立った」と回答 ・月に1回の頻度で検討会を実施する。	○情報共有の際に、検討が必要なケースについて意見を出し合う。 ○ケース検討では、内容等に応じて参加メンバーを精選し、会の実施が負担とならないようにする。 ○PDCAサイクルで取り組めるように、校内支援委員会を中心に各会議等を活用する。	○校内支援委員会参加メンバーに向けて、前期の振り返りアンケートを実施した。会の実施について「役に立っていると思う」「まあまあ役に立っていると思う」という回答が9割だった。 ○ケース検討は今年度からの取り組みであったが、1学期から早速検討したケースもあり今後の支援につなげることができた。 ○現在ケース検討は1～2カ月に一回程度行っている。実施の際には参加メンバーを精選し、スマートな会の実施に努めた。	B	○2週間に一回の情報共有の会になったため、情報共有の内容が十分ではないのではないかという意見があった。共有する内容を再度確認し漏れがないようにするとともに、内容の大小にかかわらず必要な場合はケース検討につなげるようにする。
	支援部(地域)	○自己理解につながる指導・支援方法の情報提供	○指導者や保護者の困り感や気づきから、児童生徒へのよりよい指導や支援について話し合い取り組んでいくが、学齢が上がるにつれ、本人が支援の必要性や現状の困りに気づいていないケースが増えていく。 自分に合った学びの場を検討する際に、本人の納得のもと進路決定するためにも、自分の特性や必要な支援を知っておくことが重要となってくる。	○自己理解につながる指導・支援方法の情報提供ができた。  ・教育相談 ・支援会議への参加 ・各種アセスメントの協力 ・体験学習・体験入学の受け入れ ・通級指導	○市町の主任会等で地域支援活動の案内やセンター的機能の活用について案内する。 ○教育相談の際には、必要に応じてアセスメントを実施したり、体験学習・体験入学を活用し、対象児の特性を見とり、伝える。 ○通級指導教室で活用した児童の気づきを促すための教材をclassroom等を活用し、在籍校へ情報提供する。	○市町の主任会等で地域支援活動の案内やセンター的機能の活用について案内した。 ○教育相談では、観察や検査等の中で見取った本人の困り感を伝えることを意識した。直接本人に自己理解できるようななかかわりを持つことは少ないが、自己理解を促す働きかけを伝えることができた。 ○通級指導の中では、本人が自分に向き合い、自分の思いや考え方の特徴等に気づけるような教材の開発と、振り返りに努め、自分の思いを語るができる児童生徒が増えてきた。 ○通級指導で使用した教材をクラスルームを使って、在籍校へ2回の情報提供を行った。今後も情報発信を予定している。	B	○自己理解につながる指導・支援方法を意識しながら情報提供をする。 ○研修会等で地域支援活動の案内やセンター的機能について活用しやすいように案内をする(視覚的・具体的・相談しやすい雰囲気等)。 ○評価会等で情報発信についての感想や意見を聞き、改善につなげる。
	キャリア教育部	○保護者への情報発信	○人権教育や進路に関する情報提供をしているが、受け取る側にとって学部や学年段階に合わせた情報提供が必要である。 ○コロナ禍の為、交流がなかなか予定通り実施できていないこともあり、保護者への発信ができていない。	○保護者アンケートで8割以上が「進路や人権教育・交流に関する情報発信ができています」と回答する。	○定期的なキャリア教育だより(PTA人権教育研修会・公開学習・交流関係(学校間・居住地)・進路に関する学習等の内容を掲載する)の発行(年6回) ○福祉セミナー等での保護者への事業所情報提供 ○学部だよりに学部に応じた進路情報を掲載する。 ○小・中・高等部それぞれの段階に応じた進路に関する説明をする。(学部懇談・学年懇談等)	○キャリア教育だよりは、3回発行済み。2学期に進路(実習・技能検定)、交流(居住地・学校間)、人権(参観日・PTA研修)に関する取組が多いため、今後各学部キャリア部員によるキャリア教育だより発行を目指す。  ○情報提供する事業所数を昨年度の10箇所から20箇所に増やした。保護者への視聴の呼びかけもお便りやマチコミ等複数回実施。昨年度のように期間限定ではなく、許可された事業所のみではあるが、常時公開している。  ○懇談等に必要に応じて参加し、実習に関する情報提供を行った。	B	○学部便りによる情報発信は、キャリア教育便りと内容が重なる場合が多い。そのため、「キャリア教育だより」での発信を中心としていきたい。